

「校長室の窓から」

令和8年(2026)5月11日(月)
第10号 発行：隈元 優一

🌱 **新たな学びのスタートを迎えて** —令和8年度兵庫県立網干高等学校通信制課程の開講式—
5月9日(土) 令和8年度兵庫県立網干高等学校通信制課程の開講式が、本校(西脇北高等学校)を会場として行われ、47名が出席しました。

当日は穏やかな天候に恵まれ、生徒の皆さんにとって新たな一步を踏み出すにふさわしい一日となりました。式では、網干高等学校より「自らのペースで学びを進めながらも、生徒としての自覚を持ち、ルールを守って学校生活を大切にしてほしい」との温かい言葉が贈られました。

私からは、これからの変化の激しい社会を生きていくためには、単に知識を身に付けるだけでなく、「自ら考え、主体的に行動する力」や「他者を理解し、共に生きていく力」がますます重要になることを伝えました。通信制課程の学びは、自分の歩幅で進むことができる一方で、自分自身で選び、決め、やり抜く力が求められる学びでもあります。その意味で、一人ひとりの生徒にとって大きな成長の機会になると考えています。

本校は協力校として、地域に根ざした立場から、生徒の皆さんが安心して学び続けることができる環境を整え、それぞれの夢や目標の実現に向けて、教職員一同、丁寧に支援してまいります。

当日は、連絡指導員の紹介や学習の進め方、学校生活に関する注意事項についても説明を行いました。現在、校舎工事中であることから、安全面には特に留意しながら行動するよう指導しております。

開講式後にはスクーリングの具体的な進め方について説明があり、生徒の皆さんは年間の見通しを持って新たな学びをスタートさせました。これからの一年が、それぞれにとって実り多いものとなることを願っています。



▲ 開講式の一場面

<コラム>

「恩返し」から「恩送り」へ —兵庫県教育長・木村晶子氏の講話より—

先日、県立学校長協会春季総会・研究協議会において、木村晶子教育長の講話がありました。その中で、これからの働き方や子育てを考える上で大切にしたい、印象的な言葉に出会いました。それが「恩送り(おんおくり)」という考え方です。「恩返し」とは、受けた恩をその相手に返すことですが、「恩送り」とは、誰かから受けた親切や支えを、別の誰かへ、さらに次の世代へと繋いでいくことを意味します。

人生には、育児や介護、自身の病気など、思うように力を発揮できない時期が誰にでもあります。木村教育長ご自身も、震災での被災やお子さんの看病を通して、多くの方に支えられた経験をお持ちだそうです。そして、「自分が動けるようになったときに、次の誰かを支えればよいのです」と語られました。「今は助けてもらってばかりで申し訳ない」と自分を責める必要はありません。その時にいただいた温かさや感謝の気持ちを、いつか誰か困っている人への優しさとして届けること。それが「恩送り」です。この「お互いさま」のつながりが広がることで、子どもたちが安心して育つ、温かな社会が築かれていきます。本校もまた、この「恩送り」の輪を広げる場でありたいと願っています。